

## コロナ禍で

### DV (ドメスティック・バイオレンス) を引き起こしているものとは

丹羽麻子 (国立女性教育会館専門職員)

ある女性センターで相談室を見学させてもらったことがある。騒がしく往来があるエリアから中待合をくぐってその部屋に足を踏み入れると、ほわりとした照明の光と落ち着いた静寂に包まれた。座り心地のよさそうな椅子には赤いキリムのクッションが添えてある。棚にはパンフレットや本がさりげなく置かれ、窓辺で鉢植えのアイビーが露にきらめいていた。スタッフがどんなに心を砕いて、相談に訪れる人を大切に迎えようとしているかが伝わってきて、ああ、ここで何人もの女性たちが傷を癒し、自らの尊厳を取り戻していったのだなと思った。

この春から各地のDV相談窓口に寄せられる相談件数が増えている。それを報じる多くの記事が、コロナ禍による生活不安やストレスが原因だと分析していた。…いや、さていったい、DVとは生活不安やストレスによって起きるものだったのだろうか？

DVは、夫婦や恋人といった親密な関係に対する歪んだ価値観が引き起こす暴力だ。その本質は相手の支配とコントロールにある。「こいつだけは思い通りにしていい」という考えを持った人間が、パートナー(その圧倒的多くは家族の世話係を割り振られている女性)を蹂躪するるのである。世の中がどれだけ平穏だろうと、そのような価値観のもとでは、電信柱が高いのも郵便ポストが赤いのもみなパートナーのせいになる。ストレスを感じたからといって、全ての人がパートナーに暴力を振り向けるわけではない。生活不安やストレスやはただのきっかけに過ぎない。

コロナ禍でDV相談が増えたのは、長期の在宅や失業といった環境変化によって、被害女性たちの逃げ場がなくなったからだろう。例えば「私の家事育児を点検してはくどくどと細かい文句をつける夫が4月からテレワークになった。貴重な息抜きだったパート勤めは休業要請のあおりでクビに。家計は全て夫が管理し、お前は無能だと罵倒され、狭い家の中で四六時中監視されている。一斉休校以来子どもたちも不安定。もう先の希望が見出せない」等々。DVというと殴る蹴るといった身体的暴力

を想像しがちだが、相手を不当にコントロールすることは全て暴力だ。両親の緊張関係に巻き込まれる子どもたちもまた、被害者である。

それまで家庭外からは見えていなかった暴力が、環境の変化によって明るみに出てきたのである。相談現場にいる知人に聞くと、経済的、社会的な暴力を訴える相談が目立つそうだ。災害時には既存の格差が増幅され、立場の弱い者ほど負の影響を受ける。

コロナ禍の影響下でのDVの増加や深刻化を懸念して、内閣府は電話・メール・チャットでの相談窓口（「DV相談+(プラス)」TEL:0120-279-889 <https://soudanplus.jp>）を増設した。こうした被害者支援の拡充はもちろん急務だが、もう一方で私たちが本腰を入れて取り組まねばならないのは、暴力の直接要因、すなわち「いざという時は女性を支配してよい」という考えを生む、ジェンダー不平等社会の是正である。DVは決してコロナ禍の期間に限った特異な現象ではない。直接の被害者、加害者でなくても、私たちの誰もがDVを潜在させているジェンダー不平等な社会の地続きにいる。

グテーレス国連事務総長はコロナ禍での女性に対する暴力防止を呼びかけた緊急声明の中で「女性の権利と自由は、強く、しなやかな社会にとって必要不可欠です」と明言した。誰も性別で支配されず、かけがえのないその人の尊厳が保たれる社会を、私たちはどう具体的に用意するのか。ウィズ・コロナ、アフター・コロナと言うとき、改めて深く問われているように思う。